

80. 山阪神社

所在：山坂2丁目19-23

山阪明神または田辺神社とも、いわれていました。

田辺氏は、元来、西国から移動した渡来系氏族で、現在の柏原市に拠点を持ち大いに栄えた一族であり、その分家がこの地に移住して、自らの祖先神を祀^{まつ}ったとされます。

この地名・田辺も田辺氏に由来するとされています。

神社創建の時期は不明ですが、主祭神は^{あまのほひのみこと}天穗日命（※1）で、^{のみのすくねのみこと}野見宿禰命（※2）も祀っています。

田辺氏と同系の^{はじ}土師氏の祖先神が野見宿禰命で、天穗日尊の子孫とされていることに因んでいるとも思われます。

三代実録（※3）の「清和帝^{じょうがん}貞観4年(862年)8月11日条田辺西神、田辺東神に従五位を授けた」ことが記録されており、田辺西神は当社を、東神は中井神社を示すものとされています。

元禄16年(1703年)の検地帳によれば、境内地は約30,000㎡にも及び、神社の本殿は前方後円墳の後円部に創建されているとみられています。

現場をみると、前方部が西側の公園に当たる東西方向の前方後円墳に見えてきますが、埴輪や葺石という当時の墓制に特有な付属物が出土していないので、何とも言えません。

土師氏が弓部の十六人を率い神功皇后に従い三韓に渡り偉功があり、凱旋後に摂津住吉神社創立と共に、この地に邸宅を賜り、^{うめぞのこれとも}梅園惟朝と称しました。

住吉松葉大記によると、^{おおわだつみ}大海、^{おおよさみ}大依羅、^{あぐち}開口、^{いかすり}座摩、^{いくくにたま}生国魂の末社群の上位に位置されたので、当社が住吉大社により、大変重視されていたと考えられます。

住吉大社の神馬の飼育も田辺氏に任されていた理由もうなずけます。

当社の祭儀もこの頃より梅園氏によって行なわれ、その同族にして配下の田辺宮主即ち^{ねぎちよう}禰宜長ならびに^{とねり}舎人よりなる宮座によって奉仕されたのであります。



9月朔日の例祭には、当社および田辺東ノ神（中井神社）の祭儀には梅園氏が親しく奉仕し、ことに禰宜長以下の宮座は当社に奉仕すると共に、住吉神社の神馬を飼養し日々住吉神社へ曳くを例とするようになり、当社の宮座は住吉神社との間に古くより特殊な交渉があったものと考えられます。

※1 天穗日命

古事記の名称(天之菩卑能命)から判断すると、すべてに秀でた神様となります。 出雲の国譲り(今で言う吸収合併)の交渉役選ばれて、九州の本部(高天原)から派遣されたが、おおくにぬしのみこと **大国主命**に心服して、3年間も服命しなかった人。 当世向きの平和主義の神様と言えます。

※2 野見宿禰命

日本書紀の垂仁天皇7年秋7月条に書かれている人で、たいまのけはや **当麻蹶速**が相手の生死を問わず荒っぽい相撲振りを誇示したので、天皇が全国から対向者を募り、出雲から野見宿弥が召喚されて対戦し、蹶速を蹴り殺してしまう。 野見宿弥は褒美として当麻蹶速の土地を戴き、当麻に留まる。 御陵建設等の技術集団である土師氏は、彼を始祖としている。 菅原道真も土師氏の末裔です。

※3 日本三代実録

せいわ **清和**、ようぜい **陽成**、こうこう **光孝**の3代天皇の時期に関する国史書です。

天安2年(858年)8月から仁和3年(887年)8月までの30年間を記録しています。

編者は藤原時平、菅原道真、大蔵善行、三統理平で、延喜元年(901年)に撰上されたが、時すでに律令制度が崩壊し、天皇家にとって懐古的な歴史書となった、六国史の最後の国史書です。

81. 大和川の今池遺跡

宝永元年（1704 年）の大和川の付替え工事において、柏原～堺の 14.5km を僅か 8 ヶ月の短期間で完成することが出来たのは、平地に堤を構築し、開削したのは浅香山と瓜破地域のみであったからとされています。

そのような理由から、大和川の敷設場所に当たった今池地区から、旧石器時代から近世に至る生活の痕跡を残している遺跡が大和川の左岸付近から発掘されています。

この遺跡から、難波宮と大津道を結ぶ一直線の古代道路（なにわたいどう難波大道）が敷設されていたことが確認されました。

朱雀門跡が大阪府立聴覚支援学校校庭内から出土し、これを基点として、地図上をまっすぐ南下すると、「大道」の地名が残る天王寺の教育大学東側と、[法樂寺](#)の西部や[山阪神社](#)の東部を経て、今池の出土場所までは、完全な 1 直線で結ぶことができます。

上：昭和 30 年代（1955 年～1964 年）の大和川航空写真

下：今池遺跡の発掘現場全景



82. 大和川スーパー堤防

所在：矢田 右岸 8.6 km 付近

スーパー堤防整備事業は、通常の土地利用を行うことを前提に、川沿いの土地に土を盛りかさ上げすることによって、堤防の高さの 30 倍程度の幅の広い堤防を作る事業です。

災害に対する安全性を確保できるだけでなく、環境と調和した快適なまちづくりに大きく貢献します。

大阪・東京周辺を流れる大和川・淀川・利根川・荒川・江戸川・多摩川の 6 河川の重要区間において、計画されており、東住吉では、大阪市営矢田住道第 2 住宅 1 号館と元「ラスパ大阪」の部分で事業が行われています。



83. 友愛センター北田辺

所在：北田辺 6 丁目 11-4

明治の頃、北田辺村を東西に通じていた街道（大正時代の「[庚申街道](#)」）に面して村の青年会の集会場として、「北田辺青年団会館」が建てられていました。

戦後の昭和 38 年（1963 年）、老朽化してきたので大阪市に寄付し、地域青少年の健全な育成の活動拠点として「北田辺ユースセンター」に改築され、名付けられました。

平成 15 年（2003 年）にはこれも老朽化し、その存在意義を果たしたので改築し、現在の「友愛センター 北田辺」と改称されて、地域活動の場として、活用されています。9 月朔日の例祭には、当社および田辺東ノ神（中井神社）の祭儀には梅園氏が親しく奉仕し、ことに禰宜長以下の宮座は当社に奉仕すると共に、住吉神社の神馬を飼養し日々住吉神社へ曳くを例とするようになり、当社の宮座は住吉神社との間に古くより特殊な交渉があったものと考えられます。



北田辺青年会場

84. 湯里住吉神社

所在：湯里4丁目17-9

東住吉100物語

寺社・史跡・伝承

東住吉区湯里にあります。創建年代は不明です。豊臣秀吉によって行われた太閤見地帳では除地と記載されていて、神社地として免租されていたようです。

元々この地は摂津国住吉郡^{とんだ}富田莊といわれ^{なかとみのすむぢじんじゃ}中臣須牟地神社を氏神としていました。当時、中臣須牟地神社は湯里住吉神社の南方300メートルほどの天神山という丘の麓（現在の矢田北小学校のあたり）にありました。ところが富田莊が分割され中臣須牟地神社がある地域が河内国丹比郡に編入されました。氏神をなくした摂津国側は中臣須牟地神社の祭神で住吉大社の神の一つである^{なかつのおのみこと}中筒男命を分けてもらい新たな神社を建てました。

これが湯里住吉神社で当初は須牟寺神社又は住吉神社二の宮と呼ばれていました。明治になって現在の神社名になりました。境内は狭いながら樹木が繁り住吉造りの社殿とともに神域を醸しています。



85. 曹洞宗含松山臨南寺

所在：長居公園 1 - 3 2

以前は、国鉄（JR の前身）が臨南寺を駅名とした程の広大な (33,000 m²) 森を有する禅寺（曹洞宗）です。

現在は森林の大部分は姿を消しましたが、楠や椿・^{さざんか}山茶花・^{きんもくせい}金木犀等の樹木が僅かに残り、当時の面影を留めています。

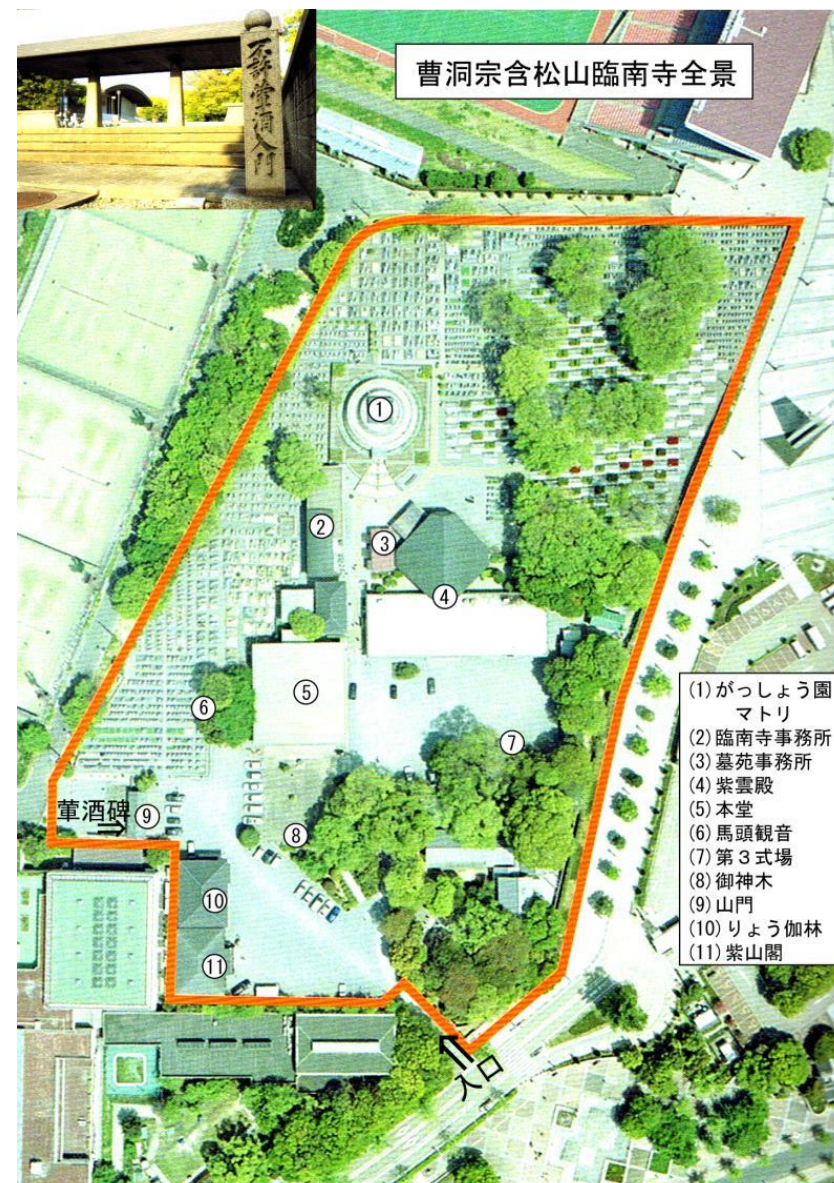
境内には樹齢 700 年の椎の大木がありましたが、昭和 25 年（1950 年）のジェーン台風で倒れてしまいました。今は万代池に住む白蛇と夫婦か兄弟の関係にあると云われた白蛇（※）が宿る神木として地上に横たえられ、現在も祀られています。

本堂内には、ご本尊・^{しゃかむにぶつざぞう}釈迦牟尼佛座像、弁財天なども祀られ、また、山門前に「^{くんしゅ}葦酒山門入るを許さず」の石碑やその奥に馬頭観音碑があります。大坂代官と天草代官を歴任した鈴木重成が、先祖を弔うために、宇治の琴坂で有名な興聖寺 5 世の名僧・^{ばんなんえいしゅ}萬安英種を招いて、正保 2 年 (1645 年) この地に建立しました。

現在は葬儀会館や永代供養の合同墓のがっしょう園マトリもあり、見学もできます。天井を覆っている金色の曼陀羅を観賞できます。

※白蛇

緑色の皮下色素が退化した奇形種の青大将で、その数が少ない処から珍しく神聖化されたものと思われます。白蛇を祭神とする神社（中井神社など）は結構あります。



86. 桑津カイコものがたり

所在：桑津



「 あっ、^{まゆ}繭になっている ! 」

カイコの変身に驚きの歓声をあげる子どもたち。牛乳パック等を利用して、^{けご}毛蚕から自分のカイコを育てます。繭から生糸をとったり、飾り物を作ったりもします。

子どもたちがカイコを育てるのは、その地名に由来しています。

桑の木が多く、津（港）があったことから地域の名前が「桑津」と言われるようになったと伝えられています。現在では、駒川や今川沿いに沢山あった桑の木もほとんど見られなくなりました。

学校校庭東隅に、とても大きな桑の木が一本あります。校舎増改築の際には、設計に配慮してこの桑の木を存続させました。

桑の葉は、カイコたちの大切な命の源だからです。

『日本書記』によると、応神天皇(四世紀)の頃、日向の国（今の宮崎県）からこの地に来た^{かみながひめ}髪長媛は、美女の誉れ高く、のちに仁徳天皇の妃になったといわれています。また、桑津天神社の伝承では桑の木を植えて、蚕を飼い、生糸をとって織物を作ったとされ、境内の八幡宮に奉納されています。



87. 晩年の坂田三吉



晩年の坂田（阪田）三吉

へのまつ
舩松人権歴史館 提供

『吹けば飛ぶよな 将棋の駒に 賭けた命を 笑わば笑え』
村田英雄の歌う「王将」で有名な坂田三吉と言えば、関西を代表する有名な将棋の名人です。豊中服部霊園にある将棋の駒形をした墓石は、勝負師坂田にあやかろうとする心無い人が削り取ったと思われる跡が残っています。

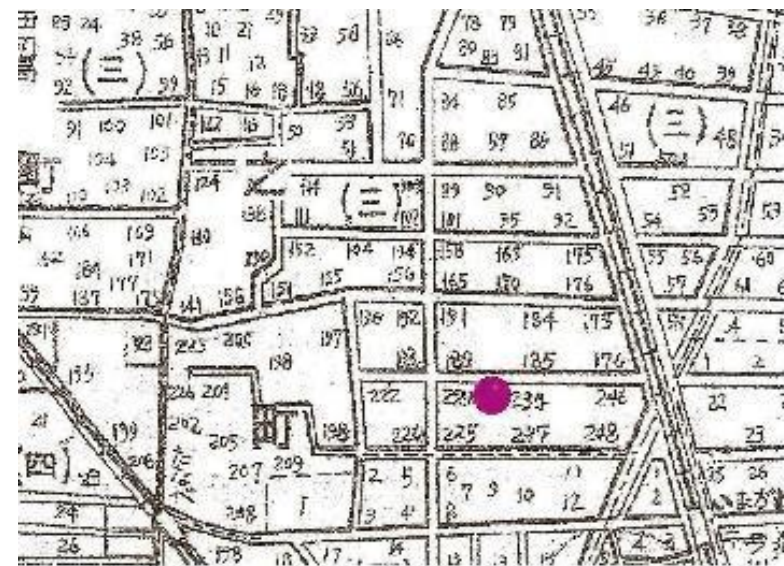
坂田三吉が堺市に生まれ（明治 3 年（1870 年））、大正時代は天王寺区伶人町で暮らしていたことはよく知られていますが、このあと吹田市に移り、昭和 18 年（1943 年）に東住吉区に転居してきたことは、あまり知られていません。ここは、三女の方の住まいに近か

ったようです。

坂田三吉はこの場所で、終戦（昭和 20 年（1945 年））を迎えています。

終戦翌年、昭和 21 年（1946 年）当時の新聞には下記の記事が掲載されています。

〔坂田 三吉（八段）昭和 21 年（1946 年）7 月 23 日午後 3 時、大阪市東住吉区田辺東之町 3 丁目 23 の自宅で死去。77 歳。〕



（画像説明）当時の地図で、場所の見当をつけてみました。（左記 赤印のあたり）

晩年の坂田三吉が、田辺に落とされた「模擬原子爆弾」に肝をひやしたり、晴れた日にはすぐ近くにある樹齢 300 年の「[北田辺の大楠](#)」あたりを杖をつきながらゆっくり散歩したりしたのではないかと、思いをはせています。

88. クラインガルテン広場

所在：矢田 1 丁目 16-22

東住吉区クラインガルテン広場は、区民と行政が協働して取り組み「花づくり・野菜づくりを通じた“まちづくり”」の活動拠点とした地域コミュニティの活性化を図る広場です。

クラインガルテン広場とはドイツ語で「小さな庭」を意味し、施設の建設は行政が、管理運営を市民が行う地域農園を指します。単に農作物の栽培を行うだけではなく、都市部における緑地の確保や地域コミュニティの場としての機能を持ちます。

平成 21 年（2009 年）4 月、東住吉区矢田 1 丁目に敷地面積：約 990 m²の広場が完成し、区民ボランティア「クラインガルテン・東住吉」が広場の管理運営を行っています。

緑あふれる区の実現、事業を通じたコミュニケーションの形成を目的として「クラインガルテン・東住吉」メンバーによる広場での活動を中心に、区の花である「なでしこ」や「田辺大根」の育成を推進し、その他四季の育成した花や野菜を通じた緑化活動の一環として、東住吉区内の各地域の集会所・会館施設・保育園へのプランターを提供、区役所正面玄関の迎春寄せ植え展示とプランターの設置、駒川欄干に季節ごとのプランター飾りの設置、駒川商店街田辺大根コンテスト参加、東日本大震災での交流「ヒサのなでしこ」等々を行っています。

大阪市の花づくり・野菜づくりを通しての「まちづくり」モデルとして話題を賑わしています。

広場では年間を通じて様々なイベントを開催しております。

① 春と秋にクラインガルテンまつりを開催し、花摘み体験や花苗プレゼント、寄せ植え講習会・いも掘り体験会、リースづくり等を企画し、多くの市民に楽しんで頂いています。

② 野菜づくり体験塾・寄せ植え等各種講習会を募集し花や緑とふれあう場を提供しています。毎月第 4 日曜日の午前中を一般開放日としていますのでお待ちしております。



89. 長寿橋

所在：中野 1 丁目 8

西今川 4 丁目の南東、今川に面した東西 130m、南北 100m の一画には、戦前「長寿園」と呼ばれていた住宅地がありました。この住宅地の名付け親で開発を行った実業家は初代のミス日本に選ばれたことで有名な女優の山本富士子さんのおじいさんです。

昭和 9 年（1934 年）頃にはこの地で住宅開発を行い、社員に優先分譲されたそうです。

最初はこの住宅地の中心部には児童公園がありました。そして住宅地の正面には幅と奥行きが 60cm、高さが 3m もある^{たつやまいし}竜山石の碑を 2 本も建て、大きな文字で「長寿園」と彫られていました。竜山石は山本さんの郷里から取り寄せられたもののようです。

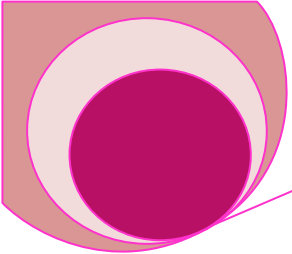
住宅地は戦後の財産税の為に、山本家が手放し、児童公園も分譲住宅とされて、立派な石碑も姿を消しました。生まれ育った人達はその石碑の行方を捜しましたが、いまだ手掛かりがありません。

ところが嬉しいことに、もと「長寿園」の東南隅にある今川に掛かる橋の名前が「長寿橋」とあり、今でもその名が残されています。

川・堀（環濠）・橋



石碑の代わりに橋の名柱に名が残ります



東住吉 100 物語

90. こうしんかいどう 庚申街道

道路・街道・交通

所在：西今川 4 丁目、針中野 1 丁目～2 丁目

庚申街道は四天王寺南大門から約 100m ほど南下した、庚申堂（四天王寺庚申堂）を過ぎ東南方へ蛇行しながら文の里を通り、桃ヶ池の北端で東に折れ、旧北田辺村の北辺を横断、さらに東へ駒川を越え今川で川沿いを南下、針中野（旧中野村）、湯里（旧湯谷嶋村）、旧住道村を過ぎ、大和川に突き当たると川沿いに東へ古市街道と出合う明治橋北詰（旧川辺村）にいたるという街道です。

江戸時代の北田辺村は、大坂の近郊農村で木綿や田辺大根などの生産地でしたが、庚申街道は四天王寺や庚申参りする信仰の道であるとともに、日常的には牛馬車を使って農作物や肥料の運搬に利用されていました。

街道の名前となる庚申信仰は、中国の道教に由来し、六十日毎のかのえさる庚申の日の夜、体内に住むさんし三尸の虫が抜け出し、その人の罪業を天帝に告げ、天帝は報告によってその人の寿命を決めるといわれ、三尸の虫の行動を封じることで広まった信仰です。

庚申堂は三尸の虫を押さえるしょうめんこんごうどうじ青面金剛童子を祀ります。庚申堂の縁起では、飛鳥時代、疫病が流行り高僧が祈ったところ、庚申の年の正月 7 日庚申の刻に青面金剛童子が現れ、祀ると疫病が退散したということから庚申の日に青面金剛童子に祈れば願いがかなうという信仰がはじまりました。

（次ページにつづく）



北田辺 5 丁目で庚申街道と下高野街道が交差しています。
画像は庚申街道から東に向いて交差点を撮影しています。



北田辺 6 丁目には地元の有志による庚申街道の由緒などを書いた
記念碑があります。

東住吉 100 物語

公園・みどり

91. 平野白鷺公園

所在：今川 6 丁目 7

アクセス：大阪シティーバス白鷺公園前下車東 200m（系統 5, 6, 73）、近鉄南大阪線下車東へ 700m
OsakaMetro 谷町線駒川中野駅下車平野方向へ東 0.7 km 中野中学東北角を左へ 0.5 km

面積：37,065 m²

公園の由来：平野白鷺公園は平野土地区画整理組合の区画整理事業により公園用地として留保し、大阪市に提供した土地の中から市が設置したものです。



◎所属行政区の変遷

設置時期

昭和 14 年（1939 年）4 月 1 日開園。開園当初は、住吉区に属していました。

昭和 18 年（1943 年）住吉区から阿倍野区・東住吉区が分区して、平野白鷺公園は東住吉区に属しました。

昭和 25 年（1950 年）[長居公園](#)（種類：運動公園）が東住吉区に設置されました。

それまで東住吉区には児童公園（酒君塚・駒川・中野・鷹合）公園は存在したが、白鷺公園は普通公園として唯一、しかも区内最大の公園でした。

昭和 49 年（1974 年）東住吉区から平野区が分区して、平野白鷺公園は東住吉区に属しました。

（次ページにつづく）

◎現在の公園の状況 令和元年（2019 年）12 月

公園のほぼ中央を南北に貫く幅 8m の道路で、東園と西園の二つに分割されています。

西園にはグラウンド 2 面・ベンチ・夜間照明設備がある。東園には中央に児童遊園地として、ブランコ大小・コンクリートの小山・砂

場・^{うんてい}雲梯・^{はしご}梯子等が設置され、そのまわりを、イベント会場・ゲートボール場・六つのブロックに分けて各地区の小学生が楠の植樹・管理を担当して来た“子供の森”が取り囲む。更にその外側に、一周 387m ジョギングコースが設けられています。

楠樹林の 1 部は櫻樹林に替っているが、その他の空き地には、^{いちよう}公孫樹・プラタナス・^{せんたん}栴檀・もくこくその他種々の樹木が植えられ花壇もあります。その他 飲水場・トイレ・公衆電話ボックス・ベンチ・あずまや・夜間照明・阪神震災鎮魂植樹碑など。当初の記録にあった国旗掲揚台・藤棚は現在見あたりません。

◎公園の周辺・設置当時の状況・風景

白鷺公園は、町会の運動会、ラジオ体操等地域の行事に大いに使われ、その頃の区民の生活に溶け込んでいました。防空の訓練にも使われました。白鷺公園が開園した昭和 14 年（1939 年）頃のこの地区の様子は、今川のうるし堤から東は大念仏寺まで、1Km 余り

見渡す限り水田でした。水田には、毎朝、仁徳天皇陵などに生息する白鷺が飛来して、餌を^{ついでみ}啄み、夕方には、数羽ずつが、雁行をなして、つぎつぎと南西の方向に帰っていきました。その光景は、昭和 30 年（1955 年）頃まで見られた懐かしい^{のどか}長閑な情景でした。

今はごく稀に 1～2 羽の白鷺が、川の小魚を獲りに来るのでしょうか、飛び立つのを見かけることがあります。

戦時中は食糧難から、カルシウムの補給源としてイナゴ取りをしました。イナゴは網や手で捕獲すると、腹から背にむかって針で糸を通し、持ち帰って暫く干してから、焼いて粉にしたり佃煮にして食しました。意外と美味しかったように思います。

当時、今川の西側は既に宅地化が進んでいましたが、東側は水田地帯であったから、春には見渡す限り

ピンクの^{れんげそう}蓮華草の^{じゅうたん}絨毯となりました。堤は、絶好の凧上げ場所で、西風を背に受けて、いくらでも糸を伸ばして空高く揚げられました。休日には、子供も大人も一緒になって凧上げに夢中になりました。

夏には、やんま、塩辛とんぼを追い、昼は蝉の声、夜には食用ガエル（別名牛ガエル）の声（牛に似た声）が響き渡る。秋には

^{こおろぎ}蟋蟀、鈴虫の声、漆堤の紅葉など季節感満点の場所でありました。

白鷺公園はこの様な野原のド真ん中であって、大人・子供・家族、皆が安心して寛げる場所でした。

ただ、日が暮れると、真っ暗で、「追い剥ぎが出る」と言われる物騒な場所でもありました。

余談ですが、その頃の田畑には野壺（人糞を肥料として溜めておく穴）が各所の田畑の角や縁にあり、子供が凧上げに夢中になって、野壺にはまる事故があるので、大人も注意する必要がありました。

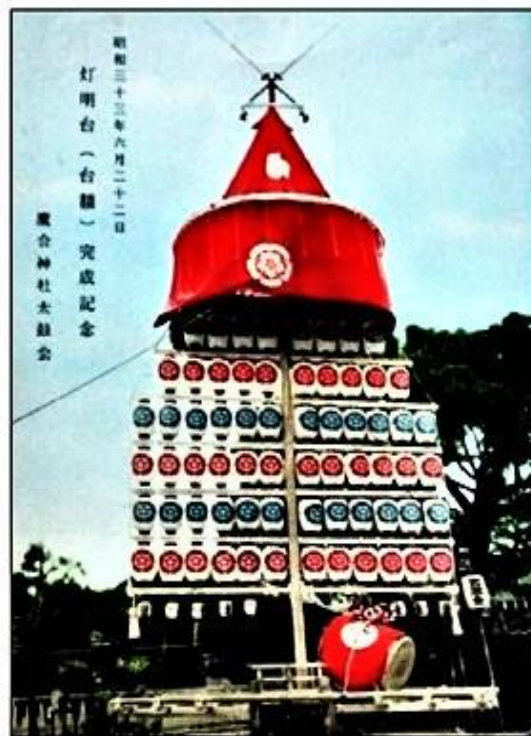
92. 鷹合神社の台額だいがく

大阪では生根神社の台額が有名ですが、かつては、鷹合神社にも大きな台額がありました。下記の写真は、(左)昭和3年御大典記念時、(右)昭和33年再建時のものです。現在では、提灯のみを鷹合神社で保管してあるとのこと。

折口信夫の『だいがくの研究』にはつぎのような記述があります。



昭和3年 昭和天皇御大典記念の時の台額。



昭和33年 完成した台額。

『だいがくの出来初めは、知れて居ない。唯老人たちは、台の上に額を載せて昇ぎ廻つたのが、原始的のもので、名称も其に基いて居るといふ。けれども今も豊能郡熊野田村の祭礼に昇ぐがく(額)と言ふ立て物と比べて見ると、或は大額の義かと思はれぬでもない。其後進歩して、台の上に経棒を竖て、一人持提灯一つ、ひげこ額などを備へた形になつて来たのだと言ふが、恐らく、経棒は最初からあつた物で、額だけがぽつつり乗つて居たのではなからう。別図の様な態を備へる事になつたのは、今から六十年程の前の事で、其以前は天幕の代りにひげこが使はれて居たのである。ひげこは、必、二重ときまつて居たさうである。明治三十年頃までは、西成郡勝間村・東成郡田辺村などには、ひげこのだいがくを昇いで居るのを見かけたものである。』

(注) 東成郡田辺村→現在の鷹合神社氏子